

被爆二世プラスの会  
核兵器廃絶目指して  
前進しましょう。

被爆二世として



会長  
川去裕子

父が広島で被爆している被爆二世です。18歳まで広島で育ちました。

父は1999年に69歳でなくなり、生前父から被爆当時のことを聞いたことはありませんが、父の日記が手元にあります。日記には、「被爆して」焼けた家にあつたいろいろなものは、もつたいないことをした。今あればどんなにいいだろう、でもそれよりも何よりも妹がなくなつたことが惜しい」と、被爆当時女学生だった父の妹のことを書き残しています。

祖母は、私が高校生になり、制服をはじめたときなど、女学生でなくした娘のことをよく話していました。また、祖母は、

被爆した当時の爆風でガラスの破片が腕に残っており、何年もたつてからガラス片が出てきたとも言っていました。

被爆二世プラスの会北海道を立ち上げてから、原爆展などで父の家族の被爆体験を語っています。核兵器禁止条約が1月に昨年1月に発効して、核兵器廃絶への道筋が見えてきていることに、私たちの手で核兵器がなくなるとわくわくしています。

後の世代にまで影響を及ぼす可能性のある核兵器をなくし、再び被爆者をつくらないために私にできることは小さいですが、周りの人たちに伝え、広げていきたいと思っています。

オンライン交流会に参加して

二世 松田ひとえ(旭川)

オンラインの交流会に参加してとてもよかったです。全国の各地で「ノーモア・ヒバクシャ」継承の試みを進めていることがわかり心強く思いました。

私たちは被爆二世です。被爆者との間には強い壁があるように感じてきました。何であれあなたが、



再びヒバクシャをつくらない

と言われることもあり、旭川で活動するにも一人です。でも今回の交流会を通じ、私たちが進めていることに自信をもつことができました。私も被爆者になつていられるのだと思えるようになりました。

新しい年を迎えてみんなで頑張っていきたいと思えます。もつと仲間と集まり、何をしたらいいかみんなで話し合いたいですね。



会員  
齋藤 哲

「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会」が設立されて10

年、それを記念するオンライン討論集会が開催された。

被爆者の高齢化とともに、継承が上手いかず、活動を縮小せざるを得ない現実が広がっている一方で、若者による継承活動も徐々に広がりがつつある。論点の1つが「どうすれば若い世代が活動に参加出来るか？」だった。

私たち、「被爆二世プラスの会・北海道」での成果を一部報告した。若い世代が馴染んでいるデジタル表現を活動に導入して、若者参加を促した。具体的には、クラウドファンディングで資金を募り、パソコン版とスマホ版のホームページを開発し、20代の若者たちから知恵を借り、画面などに活かした。若者の描いた花のイラストの背景に原爆ドームの絵が浮かび上がる形に仕上がった。



被爆者の語部活動の動画配信も強化した。また、子ども向けの絵本『北の里から平和の祈り』も発行し、英語訳を地元大学の英文科の学生にやつ

埼玉から帰って



二世  
中村 哲(あきら)

でもらった。これらの活動を通じ、若者とのつながりが生まれたことが大きい。この経験は、他地域でも活かせるのではないだろうか。

私は北海道三笠市で生まれ、美唄工業高校を卒業して埼玉県川口市の建設会社に就職、定年を迎えました。

その時、姉に勧められて被爆二世の申請をし、全国でも少ない二世手帳を取得することができ、年二回の健康診断を受けることが出来ました。

それを機に被爆者の「しらすぎ会」に入つて被団協新聞発送準備等を手伝ってきました。去年は広島市の平和慰霊式典に県代表として出席させてもらいました。後日感想文を書いて出したことで、核兵器廃絶活動の経緯と現状、今後を考えるようになりました。北海道でこの先活動を続けて参ります。